

第 42 回日本核医学技術学会総会学術大会 印象記

林 直弥
Hayashi Naoya

第 42 回日本核医学技術学会 (JSNMT) 総会学術大会は、2022 年 9 月 9～11 日に開催された。大会長は片渕哲朗先生 (岐阜医療科学大学 保健科学部 放射線技術学科), 実行委員長は村川圭三先生 (国立循環器病研究センター) で、第 62 回日本核医学会 (JSNM) 学術総会及び第 13 回世界核医学会 (会長: 共に絹谷清剛先生 金沢大学 核医学診療科) との合同開催であった。大会のメインテーマは、「核医学の過去から未来を語る!」とされており、世界核医学会のテーマである “Summarize the past half century and discuss the next half century of WFNMB” と歩調を合わせて設定された。会場は国立京都国際会館 (京都市左京区) で、JR 京都駅から地下鉄でおおよそ 20 分の立地であった。国立京都国際会館は、日本で最初の国立会議施設であり、京都議定書が採択された施設として知られている。また、建築と自然の調和をコンセプトとして設計されており、敷地内には日本庭園が設置されている。日本古来の合掌造りと現代的な様式を融合させたデザインの建築と庭園が織りなす景観は非常に趣深く、核医学の歴史を振り返り、未来を語るにふさわしい開催場所であると感じた。

大会は、前回と同様に現地開催及び Web 配信のハイブリッド形式における開催であった。大会全体の参加者は約 2000 名で、現地参加者は約 1300 名であった。現地参加者数は、COVID-19 感染拡大の第 7 波のピークが夏場にあったことが影響し、コロナ禍以前までとはいかなかったものの、前回や前々回と比べてやや盛況さを取り戻している印象を受けた。会場内には、サーモグラフィによる体温確認や



写真 左から江村氏、松友氏、筆者、宮司氏

手指消毒の奨励、マスク着用が敢行されており、十分な感染症対策が施されていた。また、会場内の座席間隔は約 1 m の距離が保たれており、参加者が密になることがないように配慮されていた。写真は、会場内にて撮影したものである。

大会のプログラムは、一般演題、卒後教育プログラム、基礎講座、JSNMT シンポジウム、JSNM/JSNMT 合同企画等の非常に多数の企画が用意されていた。なお、一般演題を除くプログラムは、現地開催後にオンデマンドにて配信されており、後日に視聴することが可能である。この開催方式の変化は、COVID-19 感染症のまん延以前と比べて唯一の良い変化であると感じている。一般演題は 129 題が登録されており、24 のセッションが組まれていた。今回特筆すべき点は、学生より登録された演題が 39 題と全体の約 30% にものぼった点である。これらの演題は学生セッションとしてプログラムを組まれていたが、社会人による発表と遜色ない発表が多数見

られており、今後の核医学技術の発展へ希望を感じることができた。筆者は、核医学治療や深層学習、デバイスレス呼吸同期 PET 機能等の近年盛んに研究されている分野に関するセッションを拝聴し、新しい技術の有用性や放射線治療の dosimetry へつながる画像特性に関して知見を得ることができた。

卒後教育プログラムは、核医学専門技師取得者を対象とした専門的な知識を得る講座と核医学専門技師取得を目指すための基礎教育講座及び教育講座から構成されており、本大会においては、すべての講座が核医学治療に関する内容で構成されていた。核医学治療に関する研究は年々増加傾向にあり、今後益々の発展が期待される分野である。本邦においては、2021 年度に神経内分泌腫瘍を適応症としたペプチド受容体放射性核種療法剤及び MIBG 集積陽性の治療切除不能な褐色細胞腫・パラングリオーマを適応症とした放射性核種療法剤が製造販売承認を受けた。講演では、これらの薬剤に関する概要や今後承認が予測される治療薬に関して説明がなされた。また、現状の核医学治療では、一般的に一定の放射線量の治療薬を使用されているが、今後は Theranostics や dosimetry を進めていくことによって、核医学治療においても個別化医療を行うことが必要となっていくとの内容が強く印象に残った。

基礎講座では、画像再構成や各検査、線量管理等 8 つの内容に関して、日常診療に必要な基礎知識や最新の知見をそれぞれの分野におけるエキスパートの先生が講演されていた。中でも、人工知能技術を用いた核医学画像処理は、近年盛んに研究が進んでいる分野であり、その歴史や特性に関して講演された。線量管理に関する講座では、医療法の改正により 2020 年度から必要となった線量管理に関して、必要な知識と運用に関して述べられていた。これらの講座は、特に時代を反映した講演であると感じた。

JSNMT シンポジウムは、「アミロイドイメージング」をテーマとし、医師と薬剤師、診療放射線技師により、診療、創薬、イメージング及び解析に関わるそれぞれの立場から 4 つの講演があった。アミロイドイメージングの有用性は、アルツハイマー型認

知症 (AD) の早期発見が可能となる点にあり、早期の保険適応が望まれている。承認への課題として、未だ治療薬が存在しないことが挙げられるが、大会終了後に早期 AD の疾患修飾薬が承認に向けて順調に申請が進行しているとのニュースが入ったため、今後の展開に期待したい。

JSNM と JSNMT の合同企画は、会長・大会長講演、合同シンポジウム、Work in Progress の 3 つが企画されていた。合同企画においては、大会のメインテーマに沿った形で核医学の歴史や未来への展望に関して、医師、診療放射線技師や製薬メーカー、機器メーカーからの講演があった。核医学検査において、大学の授業で学び、現在使用している装置や理論を当然のように感受していた。しかし、そこにたどり着くまでには過去に企業やユーザー等の様々な方の努力や研究、技術の進歩によってたどり着いたものであることを知ることができた。現代の技術者である我々も、未来へ技術を紡いでいくべく努力を続けていく必要があると深く感じることもできた。

稿を終えるに当たって、次大会である第 43 回日本核医学技術学会総会学術大会の開催についてお知らせしたい。大会長は、木田哲生先生 (滋賀医科大学医学部附属病院)、メインテーマは「核医学の学びと創造 皆が主人公！」である。会期は、2023 年 11 月 16~18 日の 3 日間で、大阪市のグランフロント大阪 コングレコンベンションセンター・カンファレンスルーム タワー B にて第 63 回日本核医学学会学術総会 (会長: 細野眞先生 近畿大学医学部放射線医学教室) と合同開催される。大阪開催は、2014 年の第 34 回日本核医学技術学会総会学術大会 (藤埜浩一大会長) 以来、9 年ぶりの開催である。今回の会場となるグランフロント大阪は、JR 大阪駅前に位置しており、駅と直結している非常にアクセスの良い施設である。次回大会では、With コロナへの変化が進み、会場にて多数の参加者の方々とお会いし、議論できることを期待する。

(高知大学医学部附属病院)